

# 太子橋中公園



## 春はサクラ、夏は木陰の涼しさ、秋はイチョウの黄葉

私は、時々太子橋中公園まで散歩に行きます。その時、地域に住む人々と話しをすることがあり、「ここにイチョウがあるやろ、御堂筋のイチョウと仲間だよ」ということが話題になります。

よく聞いてみると、御堂筋の並木用に取り寄せられたイチョウがここにあるとの話。別の話を聞くと、御堂筋のイチョウが枯れた時の補充用の木だとも聞きます。また、平成19年(2007)11月12日の日本経済新聞の記事によると、「昭和38年(1963)公園として整備されるまでは苗圃だった。大正13年(1924)に埼玉から取り寄せられ、大阪の土地に馴染むように育てられたが、御

堂筋に利用されずに残ったイチョウ」と書かれています。

他にサクラの話も出ました。かなり年月を経た古木とのことで、見れば大きく立派な樹形をしています。

このサクラは、「旭わがまちお宝」で「市内でも有数の古さと大きさを誇るサクラが太子橋中公園にあります。雄大な姿は一見の価値があります」と紹介されています。木の根を痛めないよう周囲を柵で囲うなど、地域の人々の努力により大切に育てられているおかげで、この公園では春にサクラ、夏には木陰の涼しさ、秋にはイチョウの黄葉などを楽しむことができます。



写真■春の中公園を楽しむ人々



写真  
太子橋中公園の桜(左)とイチョウ(右)

## 太子橋フィールドワークから

- 大阪のシンボルロード「御堂筋」は、大正15年(1926)に工事着手。その際、街路樹の候補として内部ではアジア原産のイチョウ派とヨーロッパ原産のプラタナス派に分かれていた。
- 季節感が得られるということでイチョウが選定されたが、大量の仕入れに苦慮。探していたところ、埼玉県安行村(現：川口市南部)にあり約千本のイチョウを買い付けた。
- 御堂筋が工事中であったため、ひとまず太子橋中公園で保管。御堂筋の緑地帯完成とともに、約800本のイチョウが運ばれたが、そのうち10数本が中公園に残されることとなった。御堂筋は、昭和12年(1937)に地下鉄とともに完成した。

## 御堂筋の公孫樹（イチョウ）と兄弟



写真■御堂筋

昔、太子橋中公園は苗圃で、御堂筋の工事が終わるまで公孫樹（イチョウ）をここでしばらく預かり、御堂筋に公孫樹を植えた後、何本かがこの公園に残りました。そのため、太子橋中公園と御堂筋の公孫樹が兄弟だと言われているでしょう。

また、桜のうち一本だけ古いのが南西の隅に囲われていますが、これも苗圃の時からあったものを公園にする時に植え替えたと言われています。苗圃の時には、そのいわれを書いたものを読むことができたそうですが、今は判読不明で100年という確証はないようです。100歳くらいのおられたら、もう少し詳しいことが人の口から語られるのではない

かと思うと、昔の人に話を聞いておかなかったことが悔やまれます。

今、この公園では、桜祭りなどの娯楽から消火訓練まで年間いくつもの行事が行われ、地域の人々の交流の場として活用されています。地下には有事のための水槽もあり、苗圃に始まってグラウンド、社宅と用途は変遷しましたが、地域のためになる立派な施設だと思います。春は花、秋は黄葉が見られ、また、スポーツや園芸など多くの人々に親しまれています。

遅まきながら、この地域史作成の勉強会に参加し、自分たちの住んでいる町の今・昔が少しでも分って、一層わが街に愛着と親しみを持つようになりました。

## コラム 太子橋フィールドワーク

本書、地域史の作成にあたっては、実際にその地域の様子を確認するためフィールドワーク(まちあるき)を行っています。平成19年(2007)10月には太子橋地域のフィールドワークを行い、平太の渡しや太子橋中公園などを見て歩きました。

このフィールドワークについては、本地域史づくりを牽引していただいた旭区の郷土史家である小井戸さんに企画から案内までをご担当していただきました。

小井戸さんは、大阪市の情報誌である「大阪人(2008.1 vol.62)」にも記事を執筆されています。



図■ルート(左)と小井戸さん直筆のフィールドワークルート案内図(右)